

～ セピア色の風景 ～

## 「給食野菜カゴ」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

そこそこの生活をしながら、子どもの給食費を堂々と滞納する親がいる昨今の給食事情とは別世界の話です。

故郷・相馬の私の小学校時代、児童の過半数は専業もしくは兼業の農家でした。また地域は、家が農家でなくてもその周りには大小の畑が広がる農村地帯でした（今もですが）。

当時、給食費も払っていたのですが、そのほかに毎月一回、「給食野菜の日」なるものがあり、全校児童が家にある野菜を持参したのです。教室には大きな竹のカゴが用意され、児童は袋や風呂敷から野菜を出し、どんどんと入れました。たまると相当の重さになり、指の痛さを耐えながら給食室に運びました。低学年のカゴの運搬はどう

したのでしよう。当番の上級生が手伝ったのでしようが、私には全く覚えがありません。何せ、カゴに入った方が早いような小さな児童でしたから。

家で野菜を生産していない家庭があったり、当日忘れたりということもあったのですが、それはそれでよし。給食費で調整するようなことはなかったように記憶しています。

遠い児童であれば、4キロの道を持つてくるので大変だったと思うし、道中野菜袋を振り回し遊びながら来るので、ときに野菜を田んぼにはらまいたりしてやってくるわけです。

野菜の種類が多い夏場はいのですが、冬場は限定されてきて白菜、ジャガイモ、大根がやたら多くなりました。さすがに偏りが激しくなつた

ときには、「なるべく〇〇以外の野菜をよろしく」なるお願いプリントが配られました。しかし考えてみれば、給食費で購入する食材もあるにせよ、児童が持ち込んだ野菜の種類と量を眺めて、1カ月の献立を考え料理していた「給食のオバチャン」たちの腕には、あらためて驚きと感謝を覚えます。

色とりどりの野菜の給食は、今やセピア色ですが、その香りと脱脂粉乳の味は色あせません

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める